王子遺跡

1983

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

序　文

今回、諸井自治会において地区公会堂の移転新築の計画が持ち上り、地区中央部に適地を求め協議の結果、王子神社境内の山林地を借地して建設することに決定した。

王子神社周辺は、道路や宅地として開発されており建設予定地も遺跡の存在は確認されないため、土砂の採掘作業にとりかかった。然し、工事中途にて古墳の遺跡らしきものが発見されたため、柴田、山崎両調査員によって確認調査の結果、遺跡の存在を認知した。

本教育委員会は地元諸井自治会と協議の上、公会堂建設予定地全域の発掘調査を行った。この遺跡を王子遺跡と命名し、古墳の外、周溝墓、土壙、土器棺等貴重な資料を得ることができた。

先年発掘調査した梅山遺跡群の調査結果とあわせみると浅羽平野における稲作文化の成生を知り得る資料として貴重なものであり、また、ふるさと浅羽を知る有力な資料があることを確信する。

この発掘調査にあたって柴田稔調査員をはじめ関係者、地元自治会の絶大なご協力、ご理解の賜と衷心感謝を申し上げる次第である。

昭和58年３月

浅羽町教育委員会教育長　鈴木　豊

例言

1、本書は、静岡県磐田郡浅羽町諸井地区の公会堂建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2、調査は、１９８２年９月７日から同年１０月２０日まで行った。

3、調査に係る費用は、浅羽町および諸井自治会が負担した。

4、調査体制は下記の通りである。

調査主体者　浅羽町教育委員会教育長　鈴木　豊

調査担当者　柴山　稔

事　務　局　浅羽町教育委員会

中村善三郎

松川幸雄

近藤秀雄

5、出土品の整理、本書の執筆は、柴山が行った。

6、調査に当っては、諸井自治会をはじめ多くの諸兄諸氏の御協力を得た。御芳名を記し謝意を表したい。

諸井自治会

会長　久保山菊治　久保田　隆

諸井公会堂建設委員会

委員長　西尾三郎

副委員長　鈴木嘉雄

会計　荒井　昇

大杉三郎

建設委員　荒井寛一、西尾勝彦、西尾　寛、荒井　礼、古田正美、久保山豊信、鈴木彰久、鈴木礼次郎、鈴木育之進、武田　実、鈴木房吉、鈴木　享(町教育委員)

王子神社代表役員　西尾治雄

同　責任役員　鈴木正美、寺田武次、西尾太吉、西尾積美津

(敬称略)

7、本書の挿図中、水平を指示する実線下の数字は、±0点からの高低差である。また、±0点は、海抜１３８０cmである。

目 次

1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．周辺の環況 …… 2
4．各遺構の概要 …… 4
　1、周溝墓 …… 4
　2、土器棺 …… 6
　3、弥生時代遺構の時期 …… 6
　4、4号墳 …… 9
5．出土遺物の概要 …… 10
6．まとめ …… 13

挿図目次

第1図　周辺の遺跡分布図 …… 3
第2図　調査区地形図 …… 5
第3図　各遺構完掘図 …… 6
第4図　1号墓、4号墳断面図 …… 7
第5図　土器棺出土状況 …… 8
第6図　1号墓埋葬施設実測図 …… 8
第7図　4号墳埋葬施設実測図 …… 9
第8図　A溝内土壙出土々器 …… 11
第9図　土器棺実測図 …… 11
第10図　4号墳出土鉄器 …… 11
第11図　4号墳出土須恵器 …… 13

1．調査に至る経過

浅羽町諸井地区の公会堂は、長昌禅寺境内の一画に設備されている。しかし、この公会堂は、同寺からの借地に建てられたもので、その契約は、1984年度で切れることになっていた。また、自治会内の家数も増加し、建物の老朽化も目立ち、全戸の集会には不都合が多くなっていた。このため、諸井自治会は、公会堂建設委員会（委員長　西尾二郎）を発足させ、移転新築を計画した。

折からの東海地震対策や、集落の中心部に近い位置、あるいは、交通の便など各種の条件を考慮して、候補地の決定は容易ではなかったようであるが、最終的に王子神社境内の山林を整地して建設することに決定した。その後各種の手続を完了し、1982年6月に着工した。この間に文化財に関する手続きも行っているが、この用地に接した南側は、かって共立浅羽中学校建設の際に埋立用に採土されいた他、遺跡地名表には、社北側に2基の古墳が記されているだけだったため存在しないものと考えたようである。

しかし、樹木の伐採を行ったところ小丘が発見された。このため、諸井自治会は、町教育委員会と協議を行って、1982年6月20日に町教委指導の確認調査を行った。

確認調査は、山崎克巳、柴田　稔の立会で、町教委職員、諸井自治会員の参加で行った。この調査は、古墳と思われる部分の南裾から南西に幅2ｍ、長さ20ｍのトレンチを設定して行ったものであるが、その結果北端に古墳の周溝と思われるもの、南端に溝状遺構と思われるものが発見され、遺跡であることが決定した。

しかし、諸事情もあって土取り工事を全面的に中止することができず、両遺構の中間部分の土取りは進行することになった。

その後、6月25日の打合せ会を初めとして、費用の負担や調査体制をめぐって数回の会議が開かれ、調査費は諸井自治会が原則として負担し、町が補助することとし、調査体制は、町教委が主体者となり、柴田　稔が調査を担当し、諸井自治会が作業員を手配することとなり、1982年9月14日に作業を開始した。

2．調査の経過

調査は、現況測量からスタートし、作業には、諸井自治会員が交代で参加した。

当初は、4号墳および南端部の不明遺構の調査を行なった。不明遺構は、攪乱が激しく遺構の検出はほとんどできなかった。4号墳は、古墳とは別に周溝墓群が存在することが判明したため、調査可能な範囲全域を調査することとした。

調査の結果は以後に述べるようであるが、10月20日にすべてを完了した。

3．周辺の環況

当遺跡は、浅羽町諸井字王子の王字神社境内の山林中にある。この境内は、現在では県道袋井大須賀線の西側に独立しているが、かっては小笠山塊から延びる尾根の先端であり、原野谷川沖積地に最も突出している部分であり、その尾根足は諸井部落の位置している自然堤防下に埋没している。この尾根上からは、1970年代の開発工事で弥生土器が採集されていたらしい。

当遺跡の周辺部では、1958年ごろに心泉院周辺の微高地から弥生土器が採集され十二所遺跡と称されている。また、1967年には、貫名地遺跡の発掘調査が行われ、弥生後期から古墳前期の住居跡4軒や、3基の後期古墳が調査されている。

当遺跡の北から東側にかけての段丘上には、だんご塚古墳群、貫名地古墳群など主として後期の群集墳が立地し、特に、だんご塚古墳群は著名である。

このだんご塚古墳群からは、明治時代に六鈴鏡が発見され、国立博物館に保管されている。また、西尾元成氏所蔵資料中には、金銅製の刀鍔がみられる。

貫名地古墳群のA3号墳は、全長約30mの前方後円墳であり浅羽町最大の古墳である。また、A5号墳は、西に開口する横穴式石室を持ち、亜角礫との模様積の玄室を持ち、円礫と亜角礫には丹が塗布されていた。出土須恵器は、遠考研編年の第III期中葉および第IV期前葉に属するものであった。

これらの古墳群は、いずれかに4世紀代に含みうる台状墓あるいは小型古墳が存在するであろうが、主体的には5世紀末ごろに開始し、7世紀代を中心に形成されたものであろう。

諸井地区には、旧上浅羽村、東浅羽村および幸浦村の一部の水田用水とされた諸井用水の川があり、その用水組合の最高権限を持つ担当人を選出する権利が専有されていた。したがって、諸井地区には、天竜川を水源とする磐田用水組合成立以前には、強い水利権が帰属していたようである。この用水組合の前身は、浅羽井組にあると思われるが貞享3年(1686)の絵図にはその存在をうかがわせる水路がみられる。この水路は、旧原野谷川の低地を利用しており、先の十二所遺跡以下青木遺跡に至る弥生時代以降の遺跡が、この低地帯に展開していたことと考えあわせると、何らかの時期に水利権を基盤とした一定地域の組織化があったといえよう。この組織化を立証する資料は、現段階では明確ではないが、貫名地古墳群A群などの成立は、水利権との関連のなかでとらえることが可能であろう。

第1図　周辺の遺跡分布図（縮尺5千分の1）

1．山畑遺跡(弥生)　2．王子遺跡　3．諸井4号墳　4．十二所遺跡　5．貫名地遺跡

4．各遺構の概要

当遺跡には、周溝墓、土壙、土器棺、古墳がある。しかし、これらの重複関係はあまり明瞭に把握することができなかった。出土の遺物からみると、これらは、弥生中期の嶺田式・後期の二ノ宮式ないしは菊川式、古墳後期後半の３時期の遺構からなるものと考えられる。

１．周溝墓

第３図にみられるように、周溝墓を構成すると考えられる溝状遺構がある。これらを便宜的に１～４号墓とするが、４号墓に関してはきわめて不明瞭である。また、用地南端発見の遺構も周溝墓と考えられるものである。

〈１号墓〉　４号墳と完全に重複している。４号墳はおそらく１号墓の高まりを利用したものであろうが、土器棺発見面の直上まで須恵器が出土している点、ＮＳ断面の４層、３層上部には須恵器が含まれている点を考えると周溝墓にも変形があると考えられる。

第３図Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの各溝によって構成されているものであろうが、Ｂ・Ｄ溝の内側壁は、４号墳によって変形されている可能性が強い。また、Ｃ溝の、ａラインは周溝墓内側壁の残存した上端と考えられる。一応、7.5×8.5ｍ程度の方形周溝墓と考えたい。

第４図の17層上面が周溝墓平坦部と考えられるが、これを規準に考えると高さは約 0.7ｍである。

埋葬施設は、４号墳の埋葬施設に切られて２基発見された。いずれも素掘りの土壙である。

１号土壙は、幅約 1.4ｍ、長さ推定 2.2ｍ、深さ約0.45ｍで平面形は長方形であり底面は平坦である。

２号土壙は、約半分が残存しているが、長さ約 1.6ｍ、幅推定 0.6ｍ、深さ約0.45ｍで、平面形は舟形であり、底面は平坦である。

いずれの土壙からも遺物は発見できなかった。

Ａ溝中央部付近に径約１ｍ、深さ約 0.1ｍの浅い土壙が発見され、内部から嶺田式土器が出土している。この土壙は、Ａ溝に伴うものと考えたい。また、Ｃ溝の壁面を一部切って土器棺が埋置されていた。

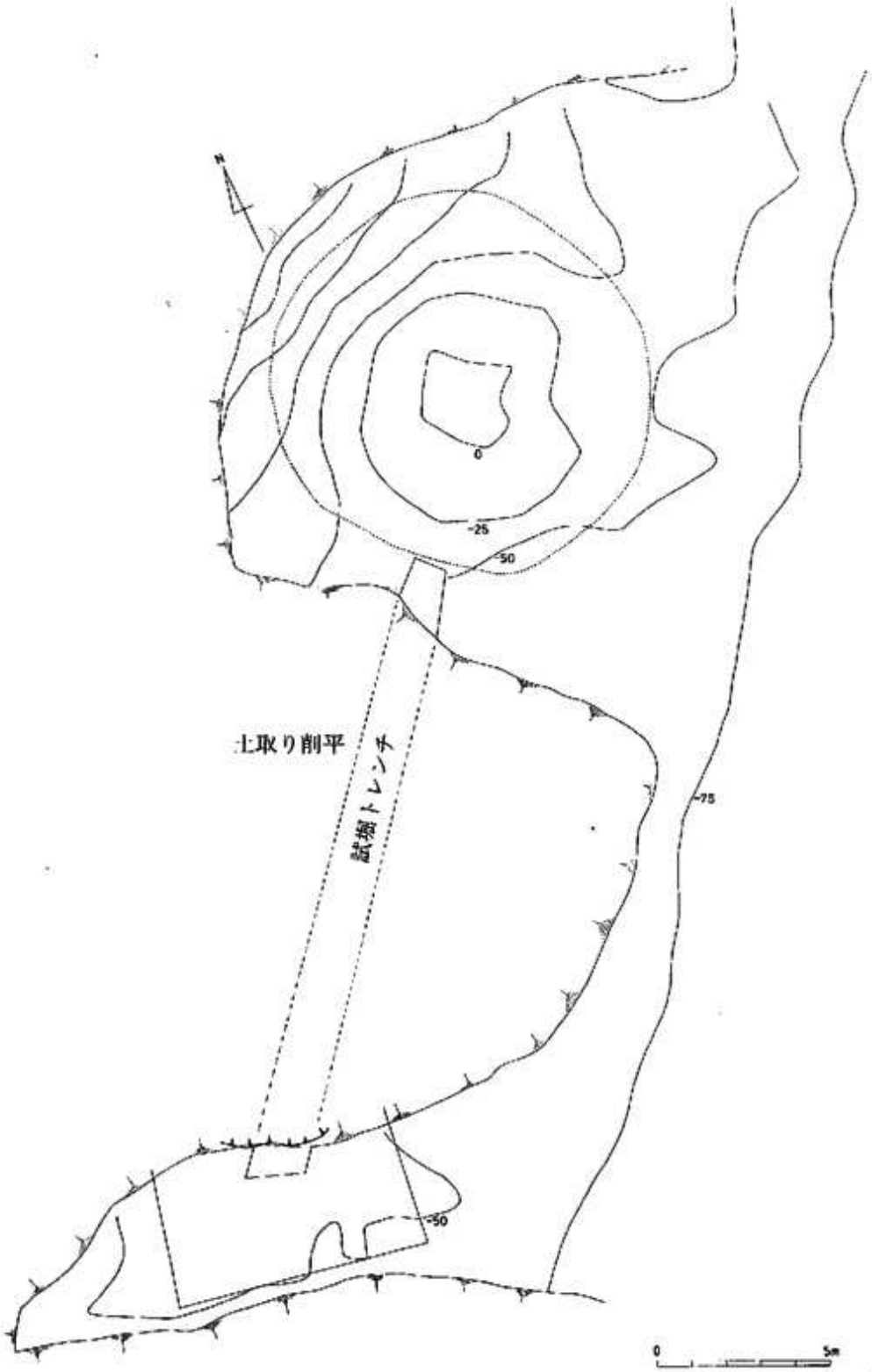
〈２号墓〉　Ａ溝を１号墓と共有し、Ｅ・Ｂ' 溝からなる径約８ｍの方形周溝墓である。東側は、旧農道で破壊されていて不明である。溝の深さは、深いところでも 0.2ｍ以下である。

埋葬施設は発見できなかった。

Ｂ' 溝から嶺山式の細片が出土している。

〈３号墓〉　用地北端に発見された。Ｂ' 溝およびＢ溝の一部からなる方形周溝墓であろう。１号墓とは切り合っているとも思われるが確認できない。径約 8.5ｍ程度で北側の山林につづいているであろう。

〈４号墓〉　Ｅ溝・Ｄ溝の一部、Ｆ溝から構成されている周溝墓であろうが、南側を破壊され不明確である。



第２図　調査区地形図

〈その他〉　B溝は、西に長く延びており、1・3号墓と関係しない部分もあると考えられ、3号墓の西側にさらに1基存在するとも考えられる。また、第2図に示した用地南端の遺構も周溝墓といいうる。

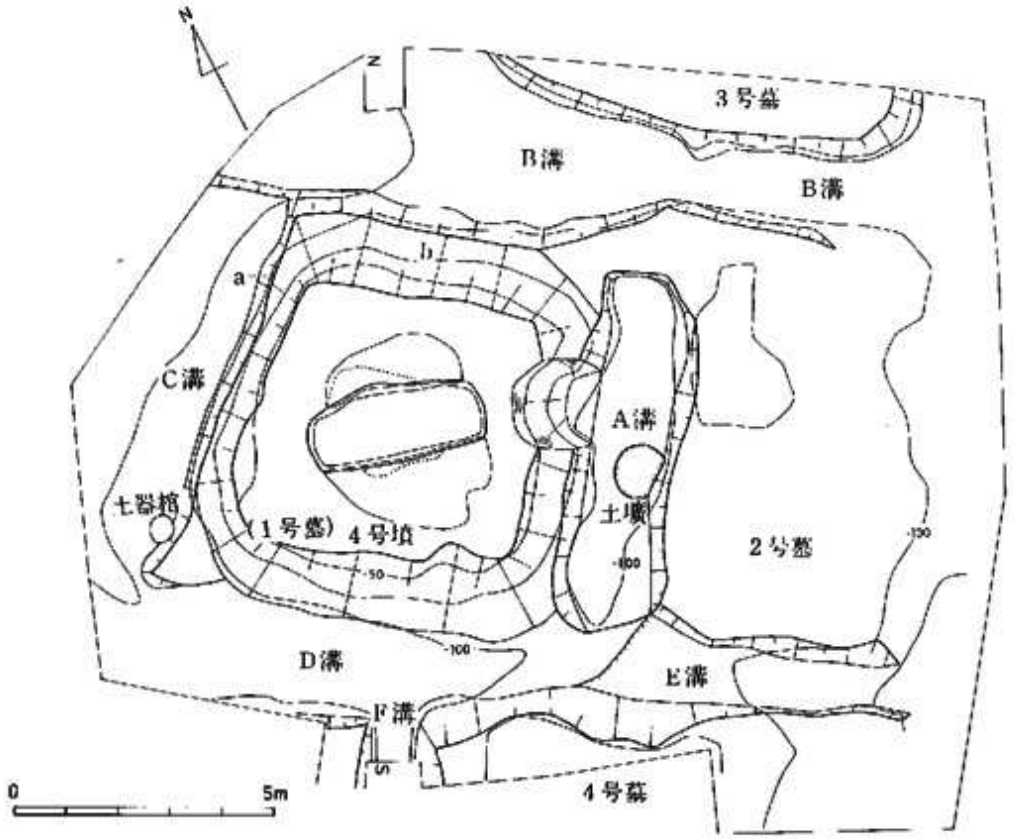
2．土器棺

C溝の南端付近に発見された。上半は4号墳に破壊されているが、壺形土器の頸部以上を欠き取り、他の壺形土器の破片で蓋をしている。身は、いわゆる菊川式の古い段階と考えられる土器であるが、蓋は二ノ宮式と考えられる。

3．弥生時代遺構の時期

遺物を伴わない周溝墓も含めて、上記の遺構はすべて弥生時代に属すると考えられるが、周溝墓が中期に属するか否かは決定し難い。

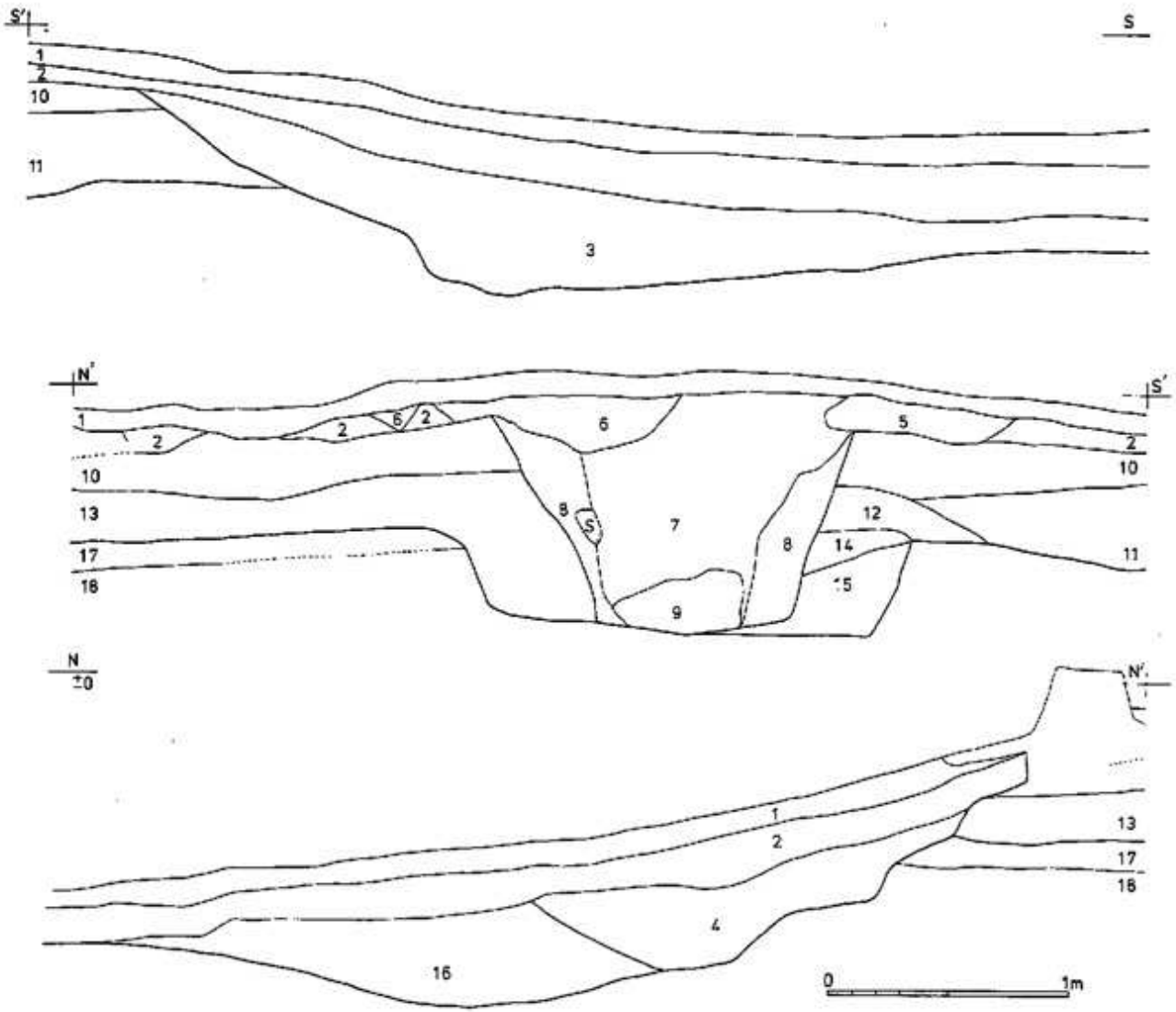
状況判断では、A溝は嶺田式を出土する土壙を伴っており、この土壙が溝内埋葬の遺構であるという前提に立って、A溝を嶺山式の時期と考えた。A溝を嶺田式の時期と考えると、1・2号墓は嶺田式の方形周溝墓ということになる。また、B'溝、E溝も2号墓を構成する溝であることから、これを共有する3・4号墓も嶺田式に属することになる。



第3図　各遺構完測図　(1号墓台部は未掘)

土層名

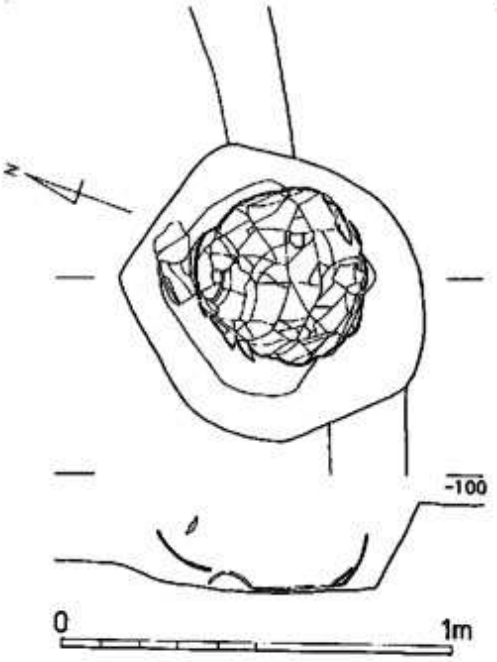
1．表土
2．褐色砂礫泥
3．黒褐色砂礫泥
4．黒褐色砂礫泥
5．黒褐色砂礫泥
6．淡黒褐色砂礫泥
7．黒褐色砂礫泥
8．淡黒褐色砂礫泥
9．灰黄色有機土
10．黒褐色砂礫泥
11．暗褐色砂礫泥
12．黄褐色砂礫粘質土
13．黄褐色砂礫粘質土
14．暗褐色砂礫泥
15．黄褐色砂礫粘質土
16．黒褐色砂礫泥
17．黒褐色砂礫泥
18．黄褐色砂礫泥(地山)



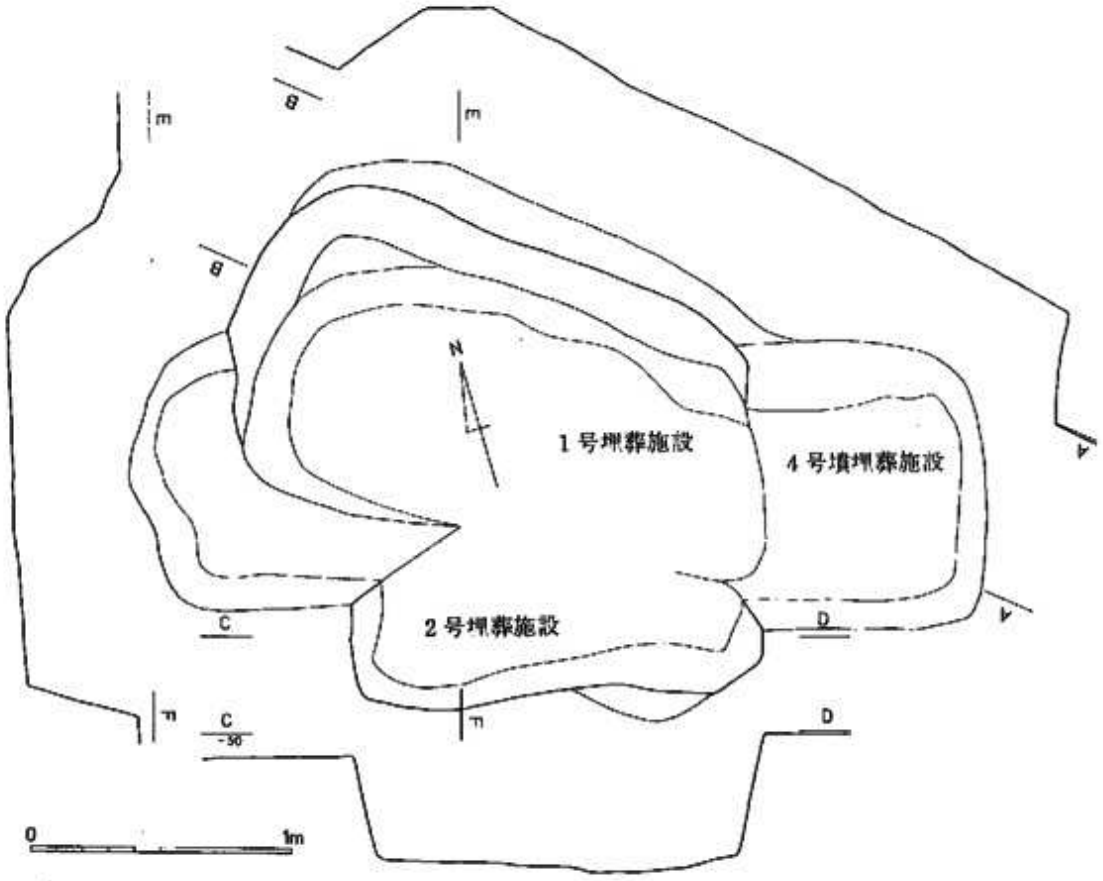
第4図　1号墓・4号墳断面図

しかし、１号墓の埋葬施設のうち１号土壙は、平面形が長方形であり、はたして嶺田式の時期に造られたか否か疑問である。また、C溝から発見された土器棺も、状況的には１号墓の溝内埋葬と考えうるものであり、矛盾している。

したがって、周溝墓の時期に関しては、可能性として各種考えられるが、土器棺が、弥生後期になってから単独で埋置され、弥生後期にあっても墓域の一部であったという前提で嶺田式の周溝墓群と考えたい。



第５図　土器棺出土状況



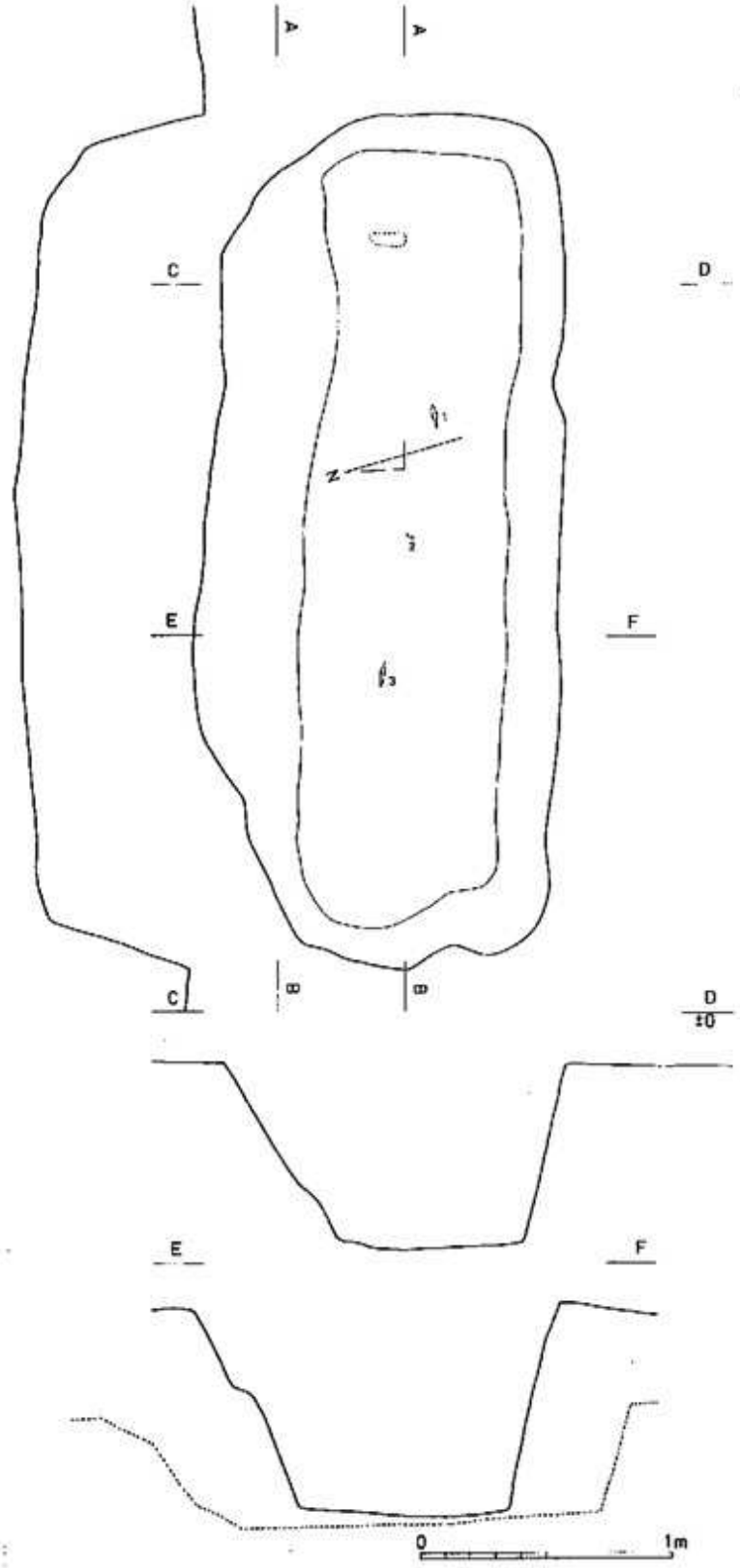
第６図　１号墓埋葬施設実測図

4．4号墳

当墳は、静岡県遺跡地名表[1]の諸井2・3号墳が所在する山林内に位置している。この付近の再踏査を行った結果、この山林内には、半壊の古墳3基と当墳が所在していることが判明した。また、諸井1号墳は、北東約600m、4号墳は、南東約300mの別の尾根に立地している。したがって、1・4号墳を当墳と同一群に含めて考えるのは通例から考えて困難なため、王子神社境内の4基をあらためて王子古墳群とし、北側から1～4号墳とした。この群が、小笠沢川流域に展開する古墳群に対してどのように位置付けうるかは今後の問題点であるが、単位群[2]ないしはその一部と考えられよう。

先に周溝墓において指摘したように、当墳は、1号墓を利用して築造されている。

第2図にみられるように、外見では基底径約11mの円墳と思われたが、全体を大きく4区に分割して調査を進めた結果は、



第7図　4号墳埋葬施設実測図
平面図内破線は丹の分布、断面図破線は1号墓埋葬施設

第3図のようであった。南西コーナー、南東コーナー付近は、第11図に示した1～7、9の須恵器が発見される下面で止めているため、古墳の旧状に近いものと考えられる。また、1号墓のC溝内壁上端がaラインであるため、それより上は古墳の墳丘として理解できる。

これらの所見を総合すれば、方墳と考えうる。

周溝は、1号墳の溝と区別し難く明確ではないが、NS断面の4層は、第11図－7、8の一部の破片を含んでおり4号墳の周溝と考えられる。4層は、B溝内壁面にそって東西に延びA溝へと曲って行くことが確認できた。この層の追求においても、古墳の裾は直線的であり方墳的といえよう。

おそらく四隅の切れる形態の周溝墓を、コーナー付近だけ整形した方墳であろう。

盛土は、NS断面でみられるように約 0.6mある。14層は、1号墓埋葬遺構内堆積とみるよりも盛土と考えた方がよいのかも知れない。また、13層は、1号墓埋葬遺構内堆積土と区別できないが、当然分層できるものであろう。

埋葬施設は、1基発見された。

平面形は隅丸長方形であり、長径3.4m、短径1.4m、深さ0.7mである。

内部堆積土の9層は、有機質の強い層であり、副葬品はこの層に含まれていた。8層は、棺のあとごめ土であろうが平面的には認められなかった。9層の東端付近にはごく少量の丹が検出されたが、これらから、棺幅、0.5～0.6m、棺長、2～2.3mの箱形の棺が予測される。

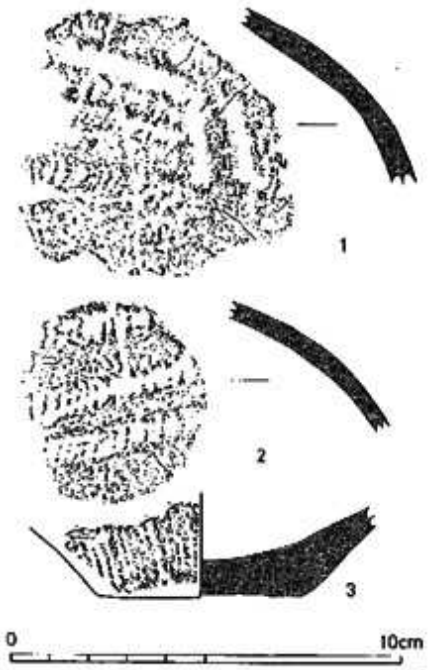
埋葬施設内からは、刀子3点が発見されたが、いずれも底面から 0.2m程上部にあり、棺蓋上の副葬と考えられる。

5．出土遺物の概要

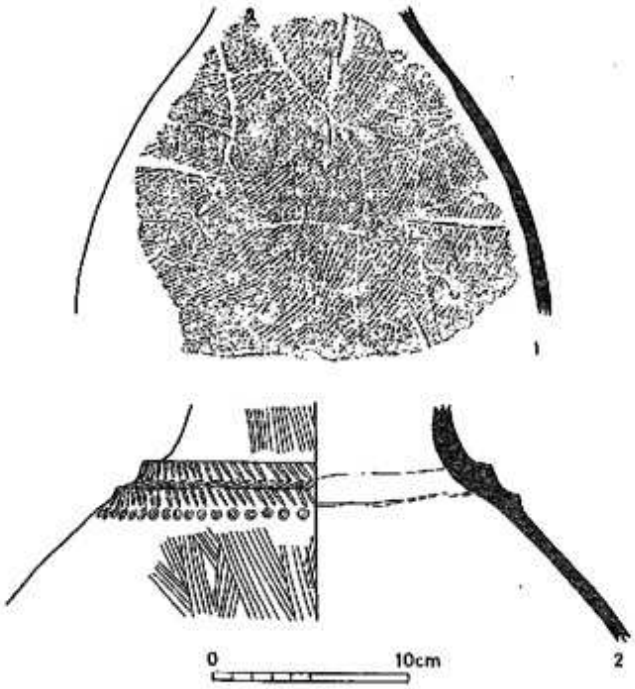
1．弥生土器

A溝内土壙発見の土器は、すべて嶺田式土器である。第8図1・2は同一個体の可能性もあるが、壺形土器胴部破片である。

C溝南端付近発見の土器棺に使用されていた土器は、蓋（9－1）については二之宮式土器と考えられる。身に使用されていた土器（9－2）は、胴部下半の稜付近まで残存していたが、肩部に断面三角形の隆帯を2条貼り付け、その上に櫛目を押圧した擬縄文を施している。さらに、その下に1列の竹管文を施している。また、胴部外面は全面に斜ハケがみられる。この土器は、竹管文に古い要素がみられるものの、菊川式土器と考えられ、身蓋が、時期的に前後する別型式といえる。もっとも、二之宮式土器は、その存在は認めうるものの、型式組成は充分に把握されていないが、菊川式の古い段階へはスムーズに移行している[3]ようであるから土器棺の時期は菊川式の古い段階ごろと考えればよいであろう。



第8図　A溝内土壙出土々器



第9図　土器棺実測図

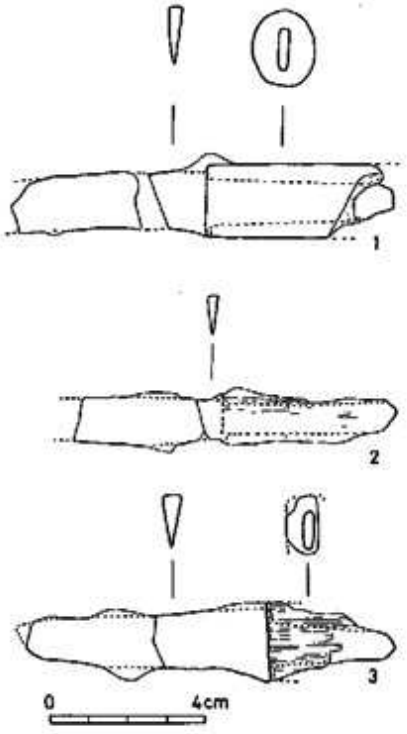
2．須恵器

表1に観察表を示したが、すべて墳丘の崩落土から発見された。

坏類と高坏は、墳丘南西コーナー付近から発見されているが、他に身蓋各1例がある。提瓶は、南西コーナー付近とB溝のNS断面付近、脚付短頸壺は、B溝のNS断面付近と南東コーナー付近に分散して発見された。しかし、出土状況は、かならずしも墳丘裾部全域に分散しているものではなく、先の3地点に集中している。また、埋葬施設の丹が検出された側を遺体の頭位と考えれば、頭位付近を中心として北・南・西方向の墳丘裾部から出土したといえる。

3．鉄器

4号墳の埋葬施設から3点の刀子が出土している。これらは第10図に示したが、いずれも柄はみとめられるが鞘の痕跡はみられない。



第10図　4号墳出土鉄器

1．4号墳出土須恵器観察表

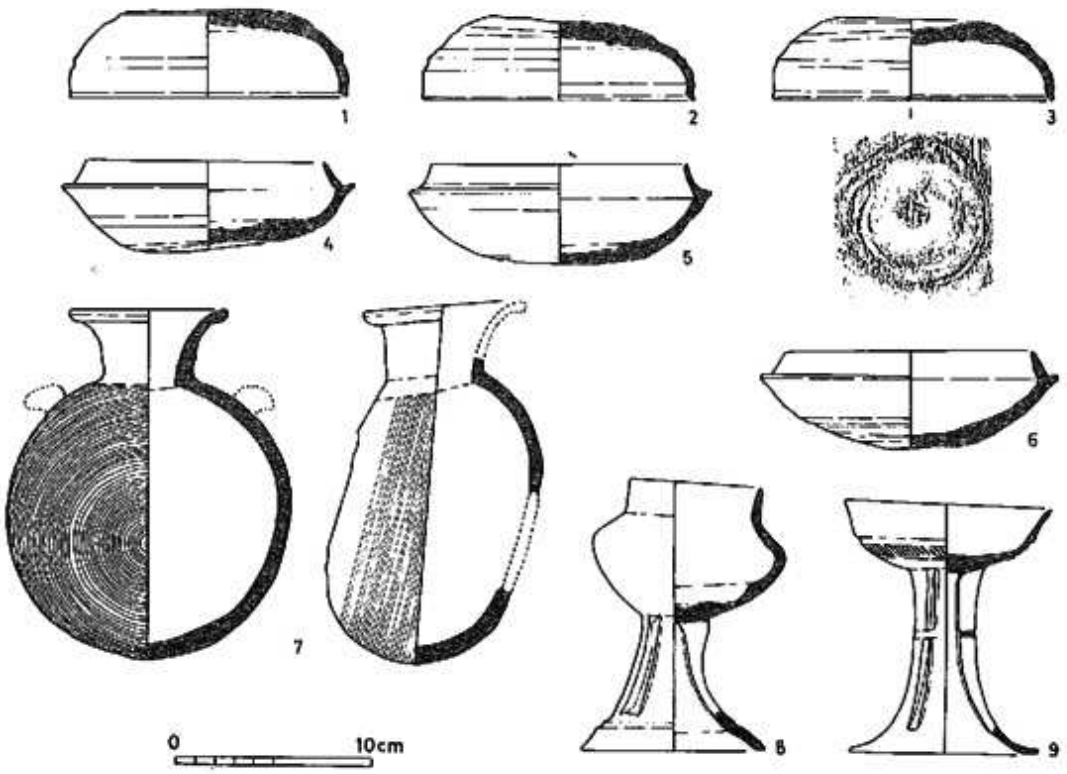
番号	法量(単位cm)	特徴 ①、器形の特徴 ②、外面の成形・調整の特徴 ③、内面の成形・調整の特徴 ④、その他
1	口 径14.1 器 高 4.5	①、口縁部は、内湾気味に外向し、端部は若干外反し、段を有する。天井部と口縁部を分ける沈線は太くて浅い ②、天井部下半から口縁部は横ナデ、天井部上半に一段だけヘラ削りがみられ、それより上はナデ調整が行われているが粗雑 ③、天井部上半にはロクロ成形痕が残る。他は横ナデ。
2	口 径13.9 器 高 4.3	①、1に類似 ②、1に類似しているが、ヘラ削りは部分的に2段となり、ヘラ削りの上に部分的な直線ナデがみられる ③、1に類似。
3	口 径14.2 器 高 4.2	①、1に類似しているが、天井部上半が大きく陥没している ②、2に類似している。天井部上面には、ヘラ切り痕がみられるが、その上に粗雑なナデが行われている ③、1に類似しているが、ロクロ成形痕の凸部には同心円文がみられる。
4	口 径12.1 最大径15.0 器 高 5.2	①、底部に陥没がみられ、受部は上外方にのびる。たちあがりは内傾し直線的にのび、端部は丸い ②、体部下半はヘラ削り、上半から受部およびたちあがりは横ナデ、底部は粗雑なナデ調整 ③、底部にはロクロ成形痕がみられ、他は横ナデ。
5	口 径13.0 最大径15.5 器 高 5.1	①、受部は下外方にのびる。たちあがりはやや外湾気味に内傾し、端部は丸い ②、体部から受部、たちあがりは横ナデ、体部下部に一部ロクロ成形痕がみられ、底部はナデ調整。ヘラ削りはみられない ③、全体に横ナデがみられるが、底部のごく一部に同心円文がみられる。
6	口 径12.6 最大径15.8 器 高 5.0	①、受部は上外方にのび、たちあがりは直線的に内傾し、端部は丸い。受部とたちあがりの境に浅い沈線がみられる ②、体部上半から受部、たちあがりは横ナデ、体部下半の一部にロクロ成形痕がみられ、それより下はヘラ削り、底部は摩耗して不明 ③、全体に横ナデがみられる。
7	口 径 8.0 器 高18.0 最大径14.6 幅 9.8	①、口縁部は丸く外方に肥厚する。前面と背面の区別は明瞭 ②、前面と背面の一部はカキ目、他の背面はナデ、頸部以上は横ナデ ③、頸部以上は横ナデ、他はナデ、背面の円板には指圧痕とヘラ状工具の刺突痕がみられる。前面の円板は欠失。
8	口 径 6.0 器 高13.6 最大径 9.9 脚端径 9.3	①、脚部は、外湾気味に開き下部はやや内湾気味に開く。端部は丸いが、甘い段を持っている。脚部には三方に1段の長方形透しがみられる。坩の口縁部は直行する ②、全面に横ナデがみられるが、透しの縁に面どりのナデがみられる。脚部下半、坩体部上半以上は横ナデ③、脚部上半はしぼり、坩体部下半から底部にはロクロ成形痕がみられる。
9	口 径10.5 器 高12.7 脚端径 9.8	①、脚部はやや外湾気味に開き下部は大きく外湾して開く。脚端部は丸い。脚部には三方に2段の長方形透しがみられるが、上段の方が短かい。透しの間には一条の浅い沈線がみられる。坏部は埦状で口縁はやや外湾し端部は丸い。体部下半に一段の櫛目押圧文がみられ、その上下に一条の沈線がめぐる ②、坏部下半はヘラ削り、他は横ナデ ③、脚部下端と坏部上半は横ナデ、他の部分はナデ。

6．まとめ

当遺跡の調査において、弥生時代中期にまでさかのぼりうる周溝墓を発見したことは、浅羽平野における稲作文化の生成を知るうえで貴重な資料である。

従来から、浅羽平野に対する価値観は、町民においてさえ過少に評価されている傾向があり、故原田　和氏でさえ「……馬場村の西北、県道寄りの山裾・畦畔から、弥生式と思われる多数の土器破片を発見した。……川上から流れて来ることも考えられるので、……直にこの弥生式遺物と決めるのは、(弥生時代の遺跡と決めるのはという意であろう。柴田注)」[4]としてその評価を見誤っている。

今回の周溝墓の発見は、遠江地方の周溝墓と集落との関連を把握したうえで検討すれば、十二所遺跡をはじめとする弥生時代の集落の成立が、弥生中期にまでさかのぼりうることを指摘するものであり、旧原野谷川の流域を背後地とした遺跡群が、袋井市域とは別に成立し発展していたことを意味している。



第11図　4号墳出土須恵器

また、諸井地区は、浅羽平野の東半分の農業用水に対する強い水利権を保有していた事実を、先に周辺の環境で指摘したが、水利権をめぐって農耕集落が地縁的に結合してゆくと考えられることの多い現在の考古学のなかにあっては、その解明・立証にも大きく影響する地区である。

今後さらに検討が加えられ、浅羽の歴史を編むこととなれば、当遺跡の調査は現代人にとっても価値あるものとなるであろう。

さて、これらの点については、大部の稿となるため機会を改めて検討することとしたいが、4号墳出土の須恵器も、須恵器編年を研究するなかでは良好な資料である。したがって、まとめにかえてその検討を行い私見を述べたい。

当墳出土の須恵器は、遠考研編年の第III期中葉に属するものであろう。[45]この第III期中葉は、陶邑古窯跡群の中村編年[46]の第II型式第4段階、田辺編年[47]のTK43型式に併行すると考えられているが[30]、私見として、遠考研編年第III期中葉を、須恵器製作技法を中心として再検討し、TK209からTK217型式に併行すると考えた。[39]その主な根拠は、坏身底部、坏蓋天井部のヘラ削りが消略されるものが第III期中葉の例に多くみられるためである。

当墳出土資料においても、この状況がみられる。観察表に示したように、ヘラ削りのみられないもの、ヘラ切り未調整に近いものもある。もっとも、ヘラ削りの上に直線ナデがみられる例もあり、製作技術のうえで陶邑古窯跡群の例に対比し難い部分もある。

観察表に示した諸特徴は、器形的にはTK43あるいはさらに古いTK10型式に併行するともいいうる。また、提瓶、長脚2段透しの高坏の共伴することからも、TK209型式以前に考えるのが無難ともいえる。

しかし、坏蓋天井部、坏身底部のヘラ削りの消略、あるいは、完全な消失といった特徴は、陶邑古窯跡群ではTK217型式以降の特徴である。

須恵器蓋坏のヘラ削りについては、陶邑古窯跡群の須恵器編年において高いウェートを占めているが、器形を主体に考え、当墳の須恵器をTK43型式ごろに対比すれば、ヘラ削りの消略という点については、遠江地方の須恵器工人の方が、畿内地方のそれよりも先行していたこととなる。須恵器製産が、東山古窯跡群においても、あるいは遠江地方の古窯跡においても独自の発展がみられたり、坏身たちあがりの貼付け手法が、陶邑古窯跡群では、他の一部の地域よりも遅れて出現することなどを考慮に入れると、先のヘラ削りの消略も、遠江地方独自の発展のなかでとらえることも可能かも知れない。

しかし、遠江地方においてII期あるいはIII期前葉とされる資料では、袋井市衛門坂、浜松市有玉古窯跡[09]にみられるごとく、ヘラ削りがはっきりとみとめられ、突然それが消略される要素はみられない。

田辺氏は、丸山2号窯の須恵器の器形と組合せは、TK43型式に対比できるが、坏身底部の回転ヘラ削りがみとめられない点からTK217型式以降の特徴であるとし、II期に属する諸特徴が長く存在した地方色を指摘し、須恵器の型式が、群集墳の盛衰に対応して変化することを述べている。[01]

この見解にしたがえば、当墳出土の須恵器は、TK217型式併行としてさしつかえないことになる。また、長脚2段透しの高杯や提瓶が、TK217型式以降に存在することも、遠江地方の群集墳が遠考研編年のⅣ期においても盛行している点を考えれば不思議ではない。

遠江地方あるいは静岡県下の須恵器編年が、須恵器の器形を重点的にとらえる方法で進められている現時点にあっては、田辺氏の見解にしたがえば多くの矛盾にぶつかる。実際に、器形の変化や大きさの変化を含めた須恵器の特徴は、唐突に変ってゆくものでもなく、陶邑窯跡群における器形、大きさの変化に準じて遠江地方の須恵器を形式の組列として図示することは可能であり、かつ、新古を見分ける手段としてある程度の妥当性は存在する。

しかし、これらの器形や大きさあるいは組成を規制した要因をどこに求めるかを忘れてはならない。東山古窯跡群においても、遠江地方の古窯跡群においても、須恵器の変遷は、地域色を持ちながらも、一部の要素を除いて陶邑窯跡群に準じている。しかし、これらが陶邑窯跡群を規範としたものであったとは理解しうるが、国家的規制によって一時期に各地で変化したことをみとめうる根拠は見出せない。

以上のような所見から、当墳出土の須恵器はTK217型式に併行するものと考えたい。そして、その時期は、田辺氏の先の論にしたがえば、7世紀前半でも初頭でないころといえる。

また、このことは、権現山2・3号墳出土須恵器のB－2類の段階に併行することになる。しかし、ヘラ削り調整が再び1率に行われるようになり、坏身底部が平坦になるという特徴とは明らかに異っている。このことは、B類の系譜がさらに細分されることを意味している。また、当墳出土資料は、袋井市大門大塚古墳[39]、山本山古墳出土[33]資料と口縁端部の調整に共通した特徴をもっており、B類の系譜にある窯跡が未発見の状況にあるといいうる。(柴田　稔)

注

(1) 「静岡県遺跡地名表」 静岡県教育委員会　1979

(2) (9)文献に用いている意味

(3) 「中遠地区の弥生後期の土器」『弥生後期の集団関係』 柴田　稔　静岡県考古学会　1983

(4) 「浅羽風土記」 原田　和　浅羽町教育委員会　1978(第3版)

(5) 「大沢・川尻古窯跡調査報告書」 山村　宏他　遠江考古学研究会　1966

(6) 「陶邑Ⅲ」他　中村　宏　大阪府教育委員会　1977

(7) 「陶邑古窯址群Ⅰ」他　田辺昭三　平安学園考古学クラブ　1966

(8) 「静岡県下の須恵器について」『須恵器－古代陶質土器一の編年』 川江秀孝　静岡県考古学会　1979

(9) 「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』第68巻4号　柴田　稔　日本考古学会　1983

(10) (8)文献他

(11) 「須恵器大成」 田辺昭三　角川書店　1981

(12) 『袋井市史』 第2編第4章　足立順司　袋井市　1983

(13) 「山本山古墳群」 佐藤達雄他　袋井市教育委員会　1971

資料紹介

浅羽町常楽寺遺跡採集の石鏃

当資料は、浅羽町松原在住の柴山静夫氏が、1950年代に常楽寺境内で採集したものである。当寺には、孔空き石を奉納する風習があったといわれており、かならずしも当遺跡のものとはいえないが、遠江の弥生時代でも古い要素を持つ磨製石鏃である。

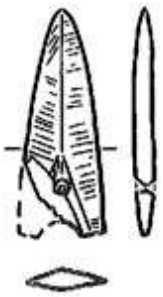
身の長さ3.75cm、幅推定1.4cm、厚さ0.38cmの黒褐色を呈した粘板岩系の石材を用いている。断面は偏平な菱形をし、基部には弧状の抉りがみられる。穿孔は両面から行われ、峰は三叉状である。

当資料が採集された付近は、旧原野谷川の自然堤防上であり、付近からは弥生時代以降の土器も採集されており、集落跡の可能性が強い。

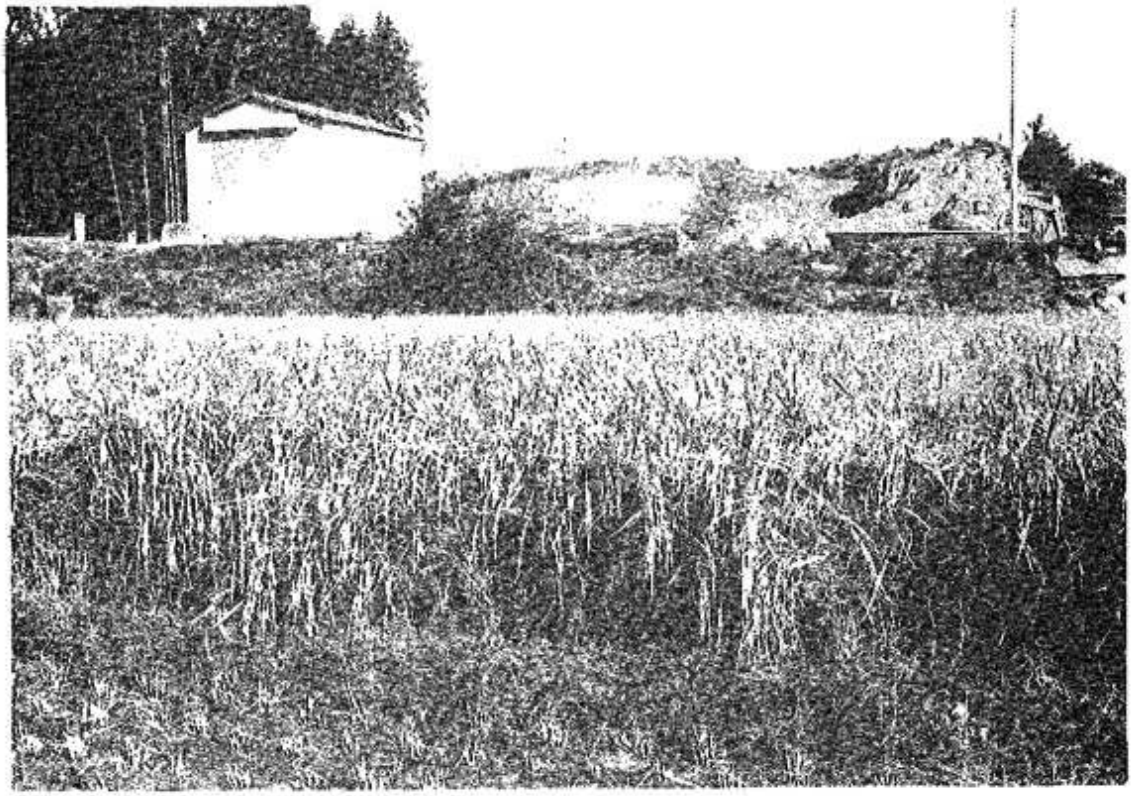
単なる採集資料ではあるが、弥生文化研究に約立てばと思い紹介した。

当資料を紹介するに当り、柴田静夫氏の御協力を得た。また、実測、トレースは鈴木敏則氏にお願いした。記して感謝の意を示したい。

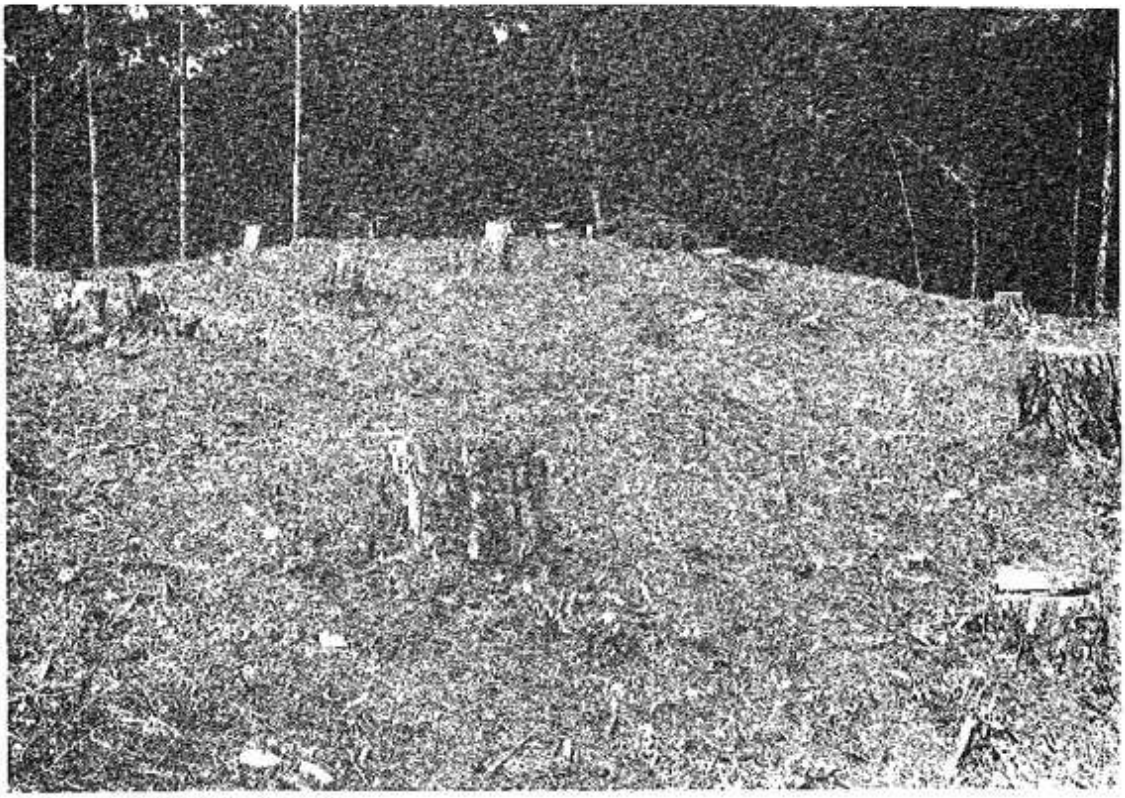
(柴田　稔)



付図1　(縮尺 $\frac{8}{10}$)

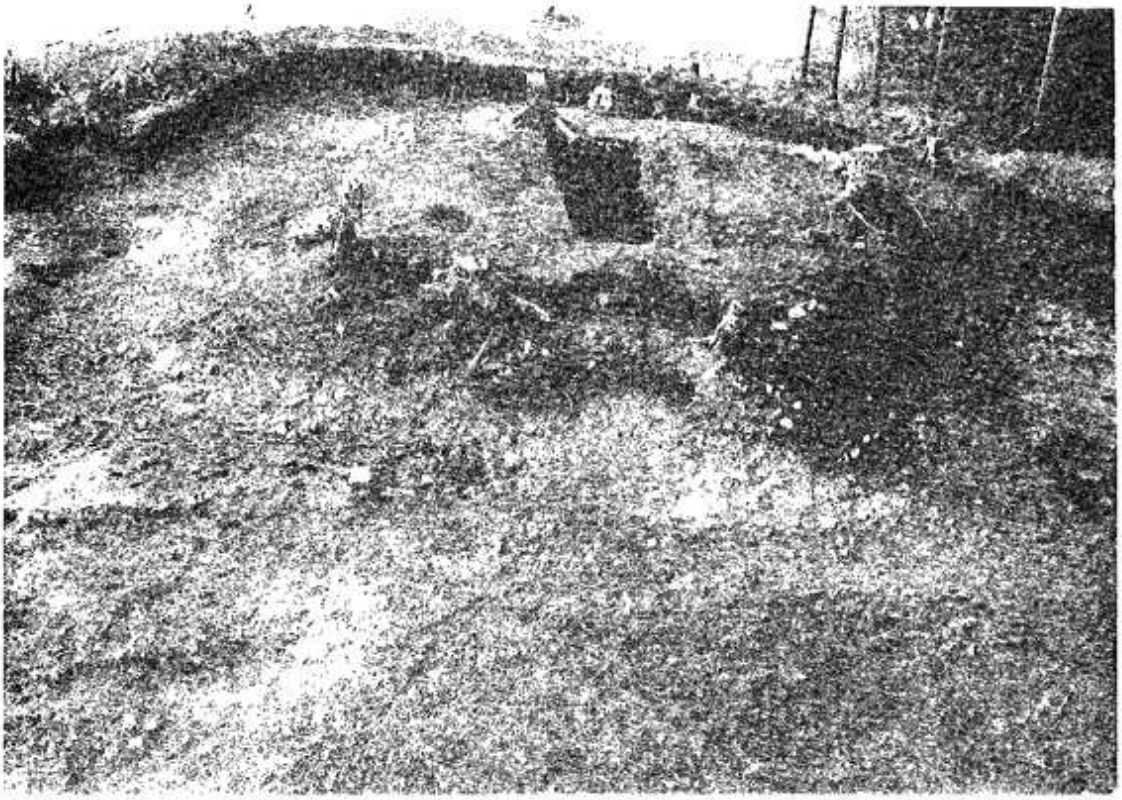


王子遺跡全景(西側より)

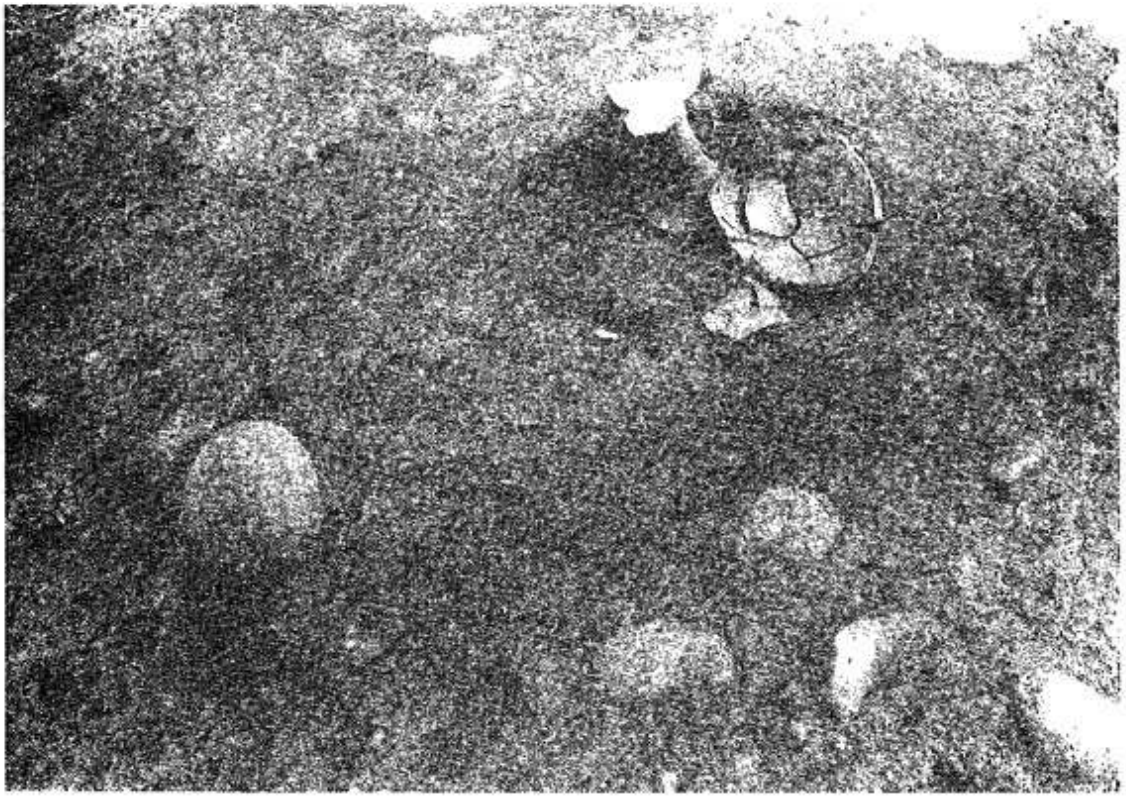


王子4号墳調査前(東側より)

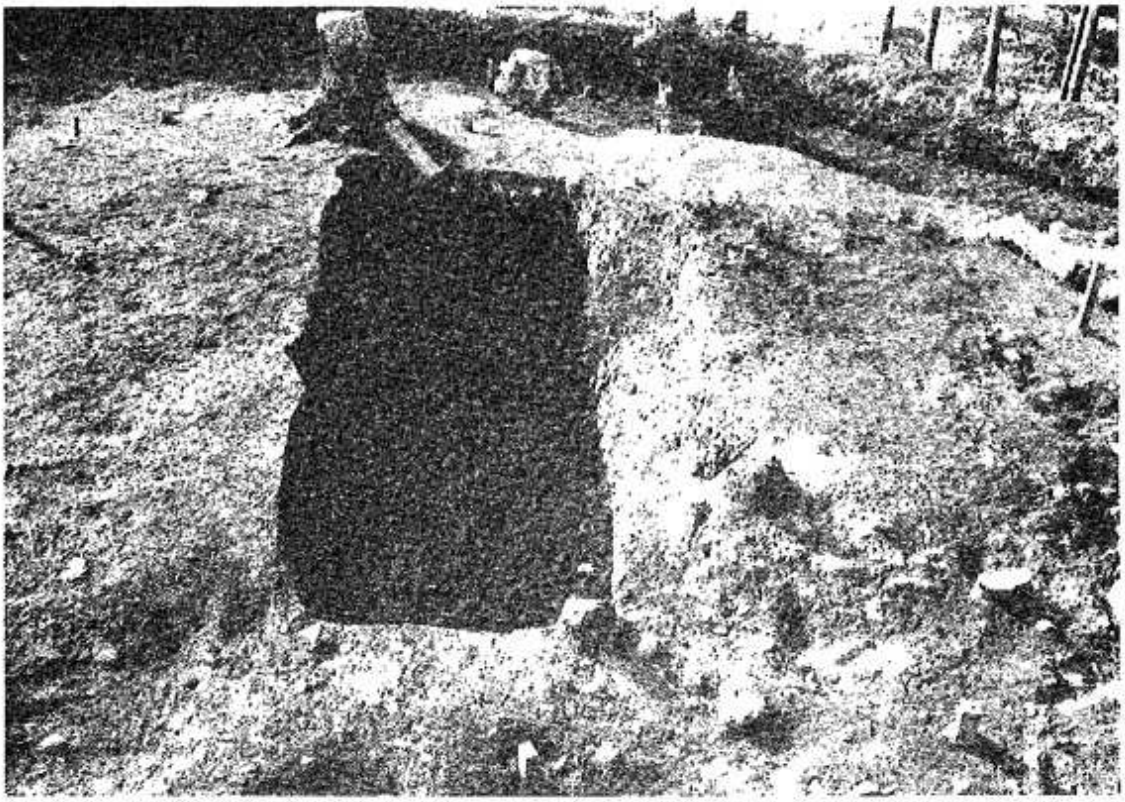
図版二、



4号墳完掘状況(東側より)



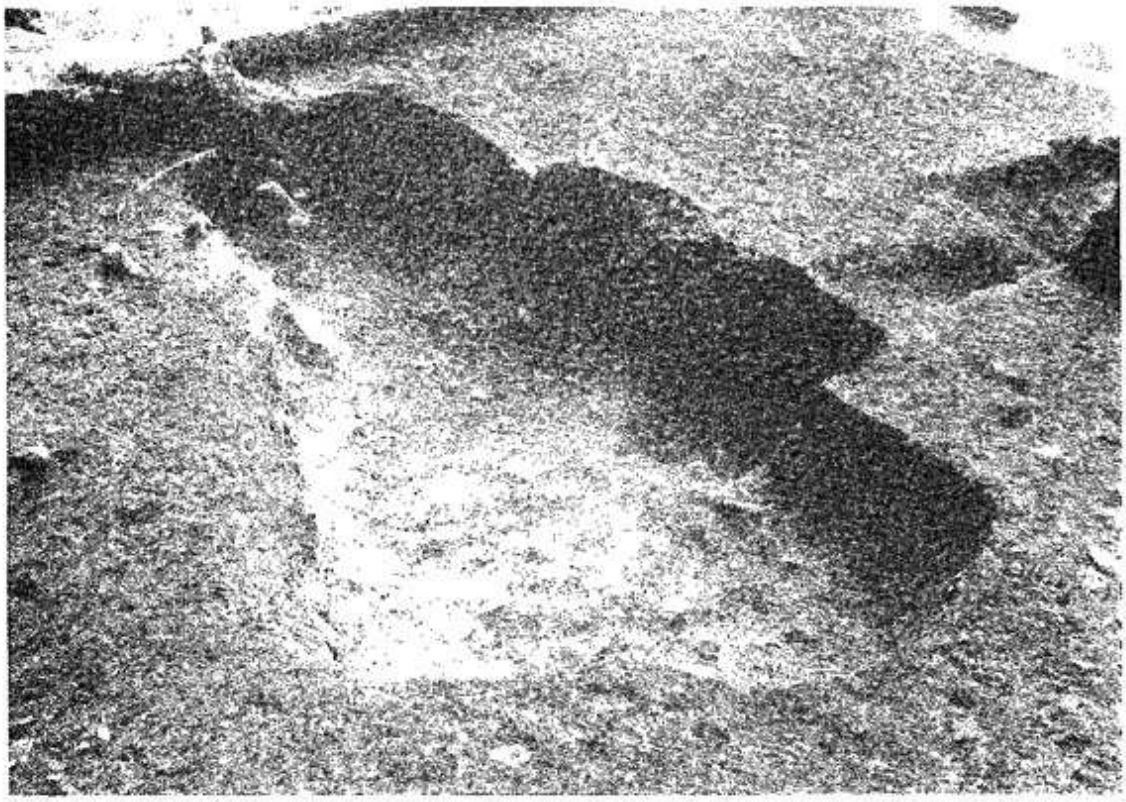
4号墳須恵器出土状況(南西コーナー付近)



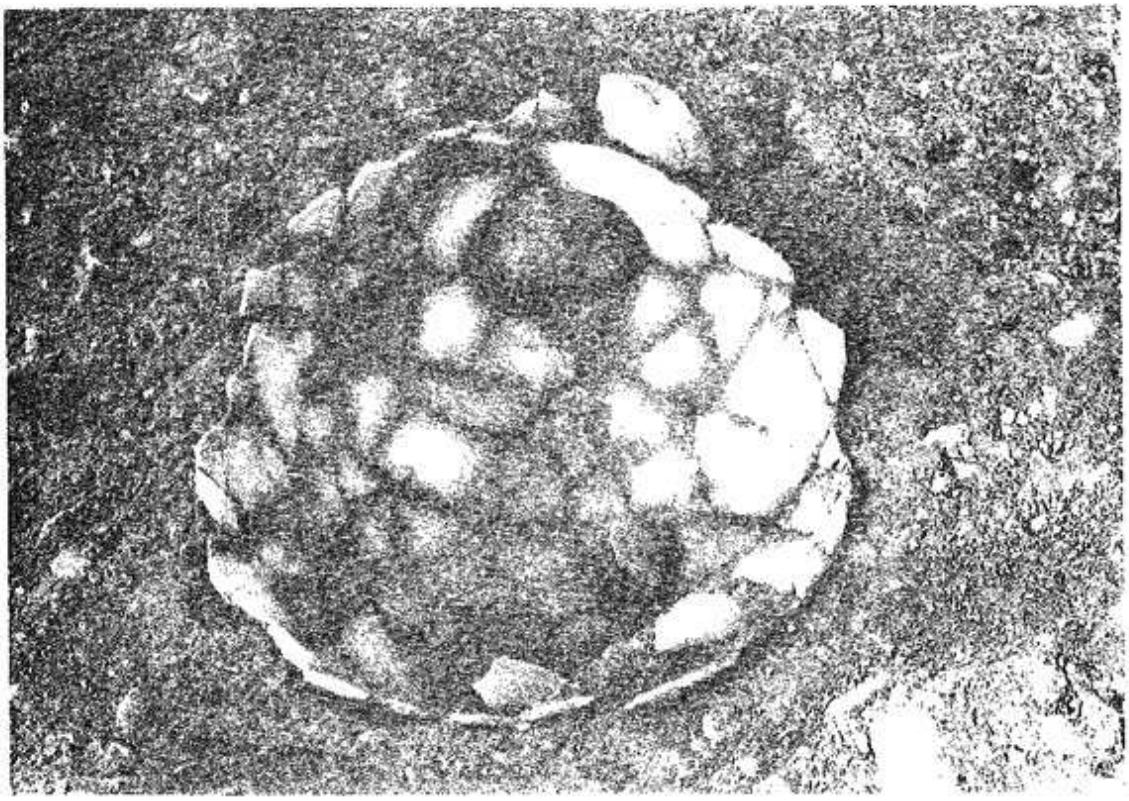
4号墳埋葬施設完掘状況(西側より)

4号墳埋葬施設埋積状況

図版四、

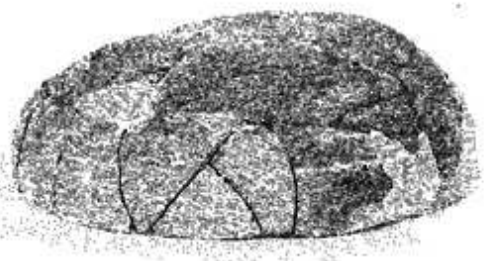


1号墓埋葬施設(西側より)

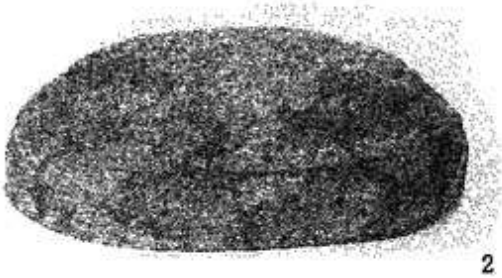


土器棺出土状況

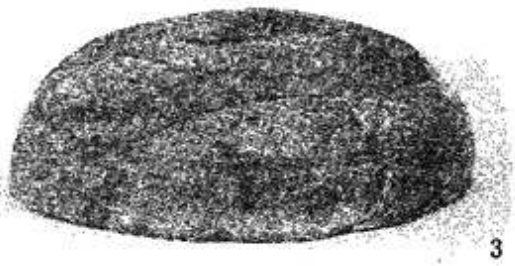
図版五、



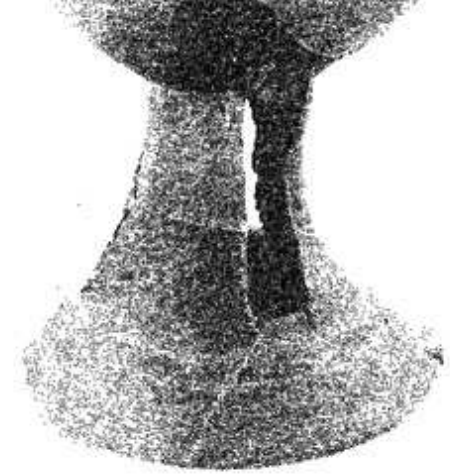
1



2

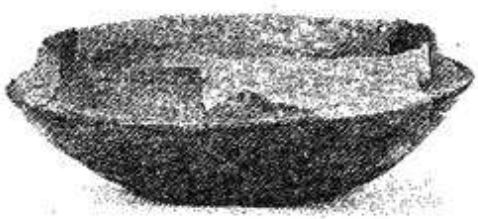


3



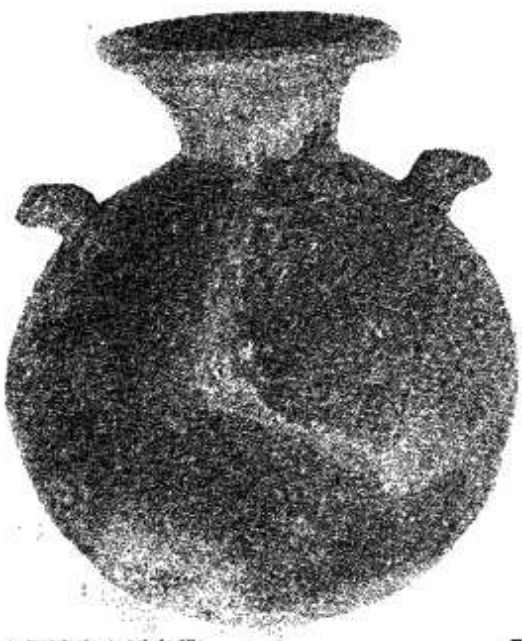
8

4



5

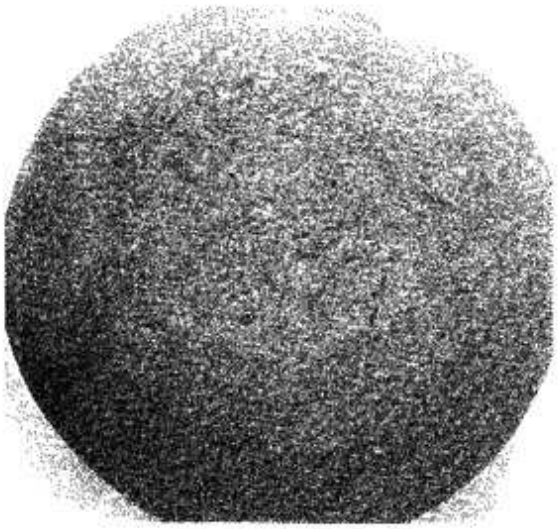
6

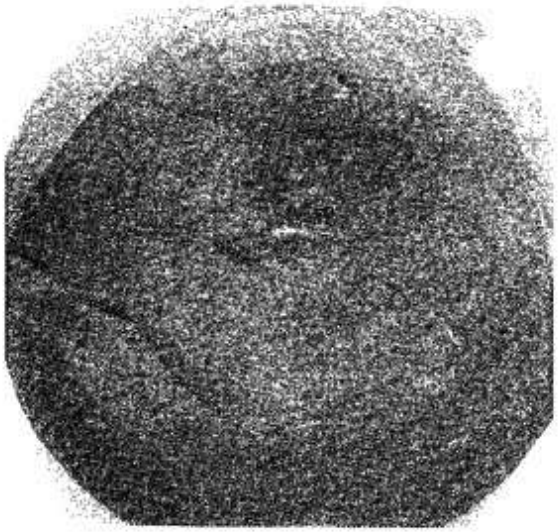


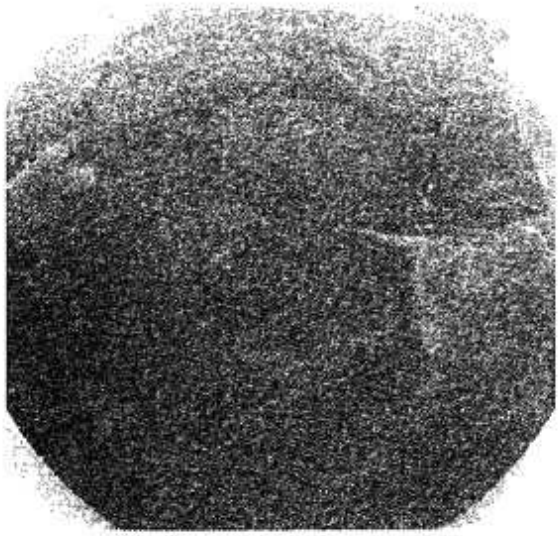
7

4号墳出土須恵器

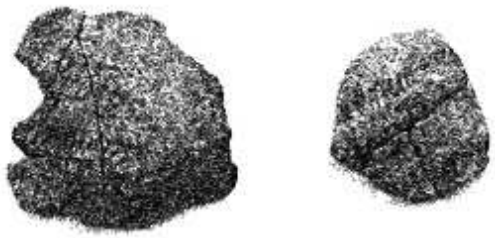
図版六、







9



右上、4号墳、右中、A溝土壙内、右下4号墳
左上、2天井部、左中、3天井部、左下5底部

1983年3月31日発行

王子遺跡

編集
発行　静岡県磐山郡浅羽町教育委員会

印刷　磐田郡浅羽町浅羽　榊松印刷